

同一戦線にある米國人にも已にこうゆうものが出て來てゐる、米國の要人もよく承知してゐること、思ふ、よくわきまえながら離れんともせず、卻けんともせずして同じ途を辿つてゐる奥の氣持を深く洞察せねばならぬ。又ソ聯政府機關紙は「チャーチル、ルーズヴェルトらが、いくら論議を繰返しても、可能性の論議では局面の打開は不可能だ、ソ聯は現實性のない空論には飽きた」といふてゐる。

四九、因果應報

積年の情誼を弊履の如くかなぐり捨て、英國は、ワシントン會議に於て、何等の豫備的談合もなく、一方的に勝手に日英同盟を破棄するや、その日からシンガポール要塞の擴充、強化が始められた。

その時に、英國の貴族トウソンは之を憂えていうには『かゝる日本との信義を裏切る行爲を英國が執るならば、日本は恐らくは重大なる決意を以て英國に反撃するであらふ、對日敵性行爲は決して英國の東亞に於ける權益を防衛するものでなくて、寧ろ將來十年若くは二十年後に大變革を餘儀なくせらるゝ危険性を胚胎するのである、かゝる英國の行爲は徒らに風波を荒くする英國の冒險である、否な英國は自から立てた荒波に翻弄せられて一步、一步奈落に顛落するばかりである』と。この豫言は果たして具現した。

英國の東亞制覇の根據地シンガポールも、隱忍二十年の皇軍、奮然として一度び起たば、脆くも潰え去つて、嘗て不落を誇りし軍港にも旭旗翩翩として翻り、昭南島と名さえ改められて丘や樹のみが昔ながらの綠に榮えてゐる、自から招いたことは、避けることができない、嚴肅なる因果應報である。天災地變は、之を防ぐ方法があつても、自から作り自から招いた禍は、^{ワザワイ}どうし

ても、^{ノカ}追れることはできないものである、自業自得の跡は歴然たるものがある
是は古今の鐵則である。

自分で自分の墓穴を掘るといふことが諺されてゐるが、英國はシンガポールに
自から好んで墓穴を掘つたのだ。

附記

英國のマタハリ船のホーク中尉は左のやうに云ふておる。

かつて吾々が使用したマレー人、インド人、支那人等が、吾々に見せたこ
とのない笑顔で嬉々として日本兵に協力して働いてゐる、吾々はこれを見
る毎に、英國も遂に東亞から追はれたといふ感が深い、この分では最早や
東亞は永久に吾々英人の手に戻ることはあり得ないであらう、*God save*
the king これはわが國歌にうたわれてゐる金言であるが、悲しい哉、今や
神はわが國を見棄て給ふたのである。

これも今日まで東亞の住民に對する壓迫、侮辱などの仕打の反動とも見るべき
であつて、矢張自業自得、因果應報である。

五〇、警世

西曆千九百六年（明治三十九年）に、英國のエリオット・イー・ミルズ氏は「
英國衰亡史」を著し、英國のやがて、衰微して滅亡せんことを憂ひて、次の九
項を擧げ一世に警告した。

一、都市生活が田園生活を壓倒し、英國民の健康と信念とに慘憺たる影響を與
へ、國民は農を蔑みて大氣中にて勤勞することを厭ひ、惡徳が社會に氾濫す
るやうになつたこと。

二、二十世紀の英國民は、療養地、保養地以外には海を忘れて曾つての海洋精

神を失ふやうになり、昔は「海は英國の母である」と子弟を鼓舞せし英國も、海員は外國人が多く、英商船の大部は外國船員によりて運行せられ、從て海軍の豫備員が少ないこと。

昔、英のデイスレリーは「英帝國は、歐洲の大陸的勢力ではなく、むしろ海洋的アジア的勢力である」といつてゐたが、今は影がうすいことになつた。

三、纖弱に流れ贅澤に染み、剛健の氣風を失つたこと。

四、文學、演劇は墮落して頹廢的傾向に走り、淺薄なる文學や、繪入の雜誌類が主なる智識の糧となり、猥らな笑劇や、懦弱にて低調なる音樂や、華美な見世物が流行すること。

五、不健全なる生活のために、英國民の體格と健康とが衰退したること。

六、英國民の智的、宗教的生活が墮落して、只自分の金から最高の利潤が上りさえすればよいと思ひ、邪教や迷信が擴つて、寺院は眠り、一般の徳行が跡

をたつやうになつた。

七、他人の金をあてにする單なる演説家や、政黨屋が都市の指導者となつて、安價な評判をとることばかりに努め、財政が混亂に陥り、國民はまた何事につけても國家にばかり頼るやうになつたこと。

八、誤れる教育が瀰蔓し、實地を知らぬ理論倒れの青白いインテリばかり作られ、學校で教はることに氣を病んで家庭の躰の眞理を忘れ、又多くの青年は海を捨て、土地を捨て、手工を捨てて商業に走るやうになつた。

九、英國民の自衛力と國防力が無力化して、英國は其の版圖が廣大で、いかに攻撃され易いといことを口にしながら實は悟てゐない、家を護ることのできない廢人のやうに、傭兵と土人隊だけを頼んでゐる、豫備將校はカルタに耽つて戰鬪法を研めやうとはせぬやうになつた。

千九百六年と云へば、今より三十餘年前のことであつて、英國の國勢が猶ほ熾

んなる秋である、このときにこの言をなすのは、信に憂世の金言である、ものゝ盛んなるときこそ衰頹を警めなければならぬ。

著者は又「我等は過去の帝國の歴史を讀んで、自戒しやう、英國民がローマ帝國衰亡史を研めるべきであつたやうに、我等は英國の衰亡史を研めやう」と云ふておる、ギボンのローマの衰運を叙べる章句は、そのまゝに二十世紀の英國に不思議なほど當て嵌ることを隨所に見ることが出来る。

例へば昔ローマは富むに隨つて農と離れて遂に亡びた、實直なローマ農夫の腐敗したのはローマの弱る第一歩であつた、又貧富の隔りがはげしくなつて「穀類とパンの施し」をするやうになつたのもローマの衰へる原因でもあつた、快樂を以て人生の目的としたローマは衰えて行つた。

又犯律の弛緩と練習の廢止で、ローマの兵士は勞苦を厭ひ、兜も甲も脱ぎすて、重き武器や、世界を震え上らした槍は、纖弱になつた兵士の手からいつと

なく捨てられてゆつた、英國兵も銃が重すぎるといつて軽い銃にとり代られたり、背囊を厭ふやうにもなつた、運動は職業團の手に移て行つた、新聞の廣告には虚弱者の特效藥などが目障になるほど多くなつてゆつた、ローマ帝國は遂に人が足りないために亡びたのである、又宗教家は只自己の殿堂にこもりて社會に對し盲目であり、眠てゐるうちに國民は亡びてしまつた。

要するに神は只「主よ、主よ」と呼ぶだけで、健康と男らしい義務に就けと云ふ神の掟に隨はないものには、一顧も拂はないのであつて、かくしてローマは覆滅したのである。

豈たゞにローマのみではない、英國のみではない、皇國にもこの時弊はありはしないか、現況に照しみて慙汗の流ることはないか。

よそ事にこれを看過してはならぬ、今日は人の上、明日は我身の上となることがある。

現状に盲目であり、甘夢を貪り、自己陶醉に陥つてはならぬ。相互に心の紐を締め直して、更に今より四十年後の皇國のすがたに、深い思を致さねばならぬ。後人をして後世皇國の衰頽を語らしてはならない。

五一、戦後の回顧

明治以來皇國の戦後の經營の歴史を回顧してみるのに、日清戦役は清國より割譲せられた臺灣の新附の生民に仁政を施すに止まり、日露戦役後には、南滿洲の猫額大の租借地や、南樺太の局部的經營の他、滿洲への進展は、事毎に米國の邪魔する所となつて、只帶のやうな南滿鐵道の地域の權益を辛ふじて保持するに過ぎなかつた、幸にも朝鮮の併合があつて、一視同仁の皇澤を半島に及ぼすことができた。

日獨戦役には、折角血を流して占據した青島も、米國の主唱する九箇國條約に強られて之を支那に返還して元も粉も失ひ、且支那の侮蔑を招くに過ぎなかつた。西比利亞出兵に至りては、一部外征せしもの、西比利亞の風物を味ひ、露西亞の一角を理解せしに過ぎず、形而上には何も残らず、何の得る所もなかつた。

滿洲事變には、我が權益を蹂躪し、暴戾にして思ひあがれる東北軍閥を懲し掃つて、幸に五族協和（大和民族を含む）の新興國、我國と一億一心の滿洲帝國が勃興し、誕生して、初めて日清、日露兩戦役後、今日まで先人の心血を注ぎし歴史に、劃期的黎明を招來し、滿洲の地下に眠れる幾多の忠靈に對し、申譯ができ、供養ができたのである。

支那事變は、東亞に共存共榮を企圖せんとする、皇國の主唱に反抗して我に挑

戦する頑迷にして暴戾なる軍閥の一部に對し、膺懲の師を起されたものであつて、一般支那生民を敵視せざるがために、宣戰の詔を拜するに至らなかつたのである。

幸に交戦なかばにして、南京に反共和平を標榜し、我と同甘共苦せんとする新政府の更生せられて、今まさに之が育成強化に協力してゐるのである。

然るに、大東亞を侵略し、東亞に蟠居し、東亞を搾取し、東亞を壓迫し、東亞を翻弄し、さては皇國を威嚇し、皇國の存在を脅し、皇國に挑戦し來れる傲慢無禮にして覇望に燃える米英の勢力を、東亞の天地より驅逐掃蕩して、東亞をして眞に東亞人の東亞たらしめんがための、宏遠なる信條、雄渾なる理念、豪壯なる企圖の下に、遂に宣戰の大詔が煥發せられたのである。

然して今次大戦の特色は、前戦役のいづれとも異つてゐて、作戦地に於て武力戦に追隨して建設戦が進められてゐることである。即ち破壊せんがための消耗

戦ではなくて、建設せんがための生産戦であることである。

大東亞共榮圈を確立して、東亞各民族をして各々その所を得せしめ、有無相通じて、共存共榮の實を擧げ、その福祉を増進すると共に、皇國の長期戦に供ふる戦力を培養せんが爲め必要なる資源の適正なる配分を享けて、確乎不動の體制を整えるのにある。

今や已に佛印、泰は我に共鳴し、マレー、蘭印、比島、ビルマなど、悉く我が治下に納められ、新秩序の建設は、硝煙なほ消えやらぬ裡に進展しつゝあるのは、實に悦ばしい限りである。

かく觀じ來るとき、過去の事跡を強て論ずる必要もないが、過去の戦役は主として我が武威を中外に宣揚したに止まつた感があつて、豊太閤の三韓征伐に彷彿たる所がある。

もちろん、之によつて、國威は大に擧り、國運は振つたのであるが、戦後の經

管は、國內の事情に妨げられ、制肘せられて、戦勝の餘勢に乗じて驥足を伸ばぶ
ることを得たかつたらみがある、舉國一致は、單に戦争實施中だけであつ
て、戦が終れば、直ぐに甲派乙派が國內の小天地に相闘めぎはじめ、内争のた
めに力を外にのぶるに違がなかつたのみならず、外侮をさへ招くに至り、外國
に乗すべき隙をみせた、慨かほしきことであつた。

今回の大東亞戦は、斷じてこのやうであつてはならない、戦の續くかぎり、敵
の屈伏するまで、建設や經營が、武力に劣らぬ眞劍さをもつて、一億一心の總
力をあげて勇壯に且つ快調に進展せねばならぬ、いかに長期に亘るふとも、い
かなる難苦にめぐり逢ふとも、決して弛んではならない、決して滞つてはなら
ない。

かくして、この雄大なる戦争を完遂し國家萬年の計を定め、東亞を安定して皇
澤を四邊に光被せしめねばならぬ。

之が聖旨に應へ奉るゆえんであり、靖國の忠靈を慰めるゆえんでもある。

史は師である、史には教訓もあれば示唆もある、吾等は靜かに具さに過去を顧
みて將來の謀に遺算のないやうに努めねばならぬ。

信に大東亞の盟主たるに慙ぢないやうに、心せねばならぬ。

歴史の大轉回に際し、皇國は世界還視の下に國運を睹して大試練に直面してゐ
る、吾等の眞の底力を示すべき秋である。

五二、結

言

大東亞は、東條首相が豫て警告せられてゐるやうに「長期戦」を覺悟せねばな
らぬ、今や腕競べ根競の時代相を表はして來た、人と物と財との豊かなる米國
は、いよ／＼戦時體制の整備に乗りいだし、夥しき軍費を擲らて、建艦に造機

に懸命の努力を拂ひつゝある、已にソロモン海には新造の航空母艦さえ現はれた、「好き敵、御參なれ」で毫も恐るゝ所はないが、「戦はこれから」の感じを深からしめる。

顧るに日清戦争も、日露戦争も、略ぼ暮年にして干戈をおさめたので、戦争は直きに勝利を以て局を結ぶものと思ふ向もあるが、過ぐる歐洲の第一次戦争は四年餘を費し、今回の支那事變も已に五年に垂んとしてゐる、戦争が長期に亘ることは、時勢の然らしむる所である、然し更に考えてみると、戦争の長びくことは、單に時代相であるばかりでなく、皇國の歴史を繙いてみると、昔源頼義が陸奥の安倍貞任を討伐した前九年の役もあり、細川、山名兩族の争の應仁の亂も恰も九年を闊してゐる、又武田信玄と上杉謙信が事を構えてからは、約二十年間、戦をつゞけ、かの有名なる川中島の合戦は、ほんのその一局面に過ぎない、更に豊臣秀吉が征韓の役は、文祿、慶長に亘り七年に及んでゐる。

又我神州を覬覦した元軍は、亞細亞と歐洲とを席捲せし餘威に乘じ、我を征服せんとして、屢々西陲に來寇し、いつも撃退せられたにも拘らず、執拗に其の初志を貫徹せんとして機を窺つてゐたが、皇國の嚴乎たる姿に遂に其の野望を棄つるに至たのは、文永年後約二十三年目であつた、神風一過で終を告げたのではない。

然しこゝで考えなくてはならぬことは、十年、二十年といふ歳月を長いと感ずるのは、個人の一生を基準としての感であつて、悠久幾千年の昔から、無限の將來に向つて進みゆく彌榮の皇ら御國の歴史からみるときは、十年や二十年は、ほんの一瞬の束の間にも等しいものと云はなければならぬ。

長い短い、すべて比較の話であつて、一年を長しとすることもあれば、百年を短しとすることもある、吾等は大東亞戰を個人の立場から見ることなく、皇國の歴史の上からその意義を確かりと把握して之に拂ふべき努力と歳月とを測

らねばならぬ。

大東亞戰は、單に皇國存亡のためのみでない、東亞十億の民生のための雄大な聖戰である、さればその規模が豪壯であつて、之を完成するのは、短日月の能くする所ではない。

何はさておき、先づ強敵、米英の戦力を撃碎してその戦意を挫かねばならぬ、之には高度國防國家の體制の充實が大切であつて、その他のことは之を充實せんがためであるといふ觀念を堅持しなければならぬ。本末をよく辨えねばならぬ。

曰く軍備の増強、軍需の充實、曰く人口政策、曰く國民動員、曰く勞務の充足、曰く能率の増進、曰く國土計畫、曰く交通動員、曰く交易計畫、曰く生産擴充、曰く資源愛護、曰く生活刷新と確保、曰く職業の再編成、曰く貯蓄の增多、曰く何と、盡すべきことは累積してゐるが、特に緊要にして切實なること

は、個人主義や自由主義の誤れる思想を清掃し拂拭して、益々神ながらの奉公の精神を昂揚し、志氣を振興することである、吾等はこの際、國を擧げて一億同心、大君のために何もかも總てを捧げて皇謨を翼賛し奉り、大東亞戰の決末を光輝あらしめ、皇國の歴史に一段の光彩を加ふると共に、東亞民族、萬年、萬々年の和平と福祉とを企圖せねばならぬ。

之が現代の皇民に課せられたる命題であると共に義務である、勇ましくも雄しき試練ではないか、相互に手を握り合つて奮起しやうではないか、茲に注意すべきことが更に二つある、その一つは南方熱であつて、近時は、新しく攻略した南方に萬人の視聽が集注されて、その熱意が騰つてゐるが、新しきを好むが如き輕浮なる氣持や、山村の人が物の豊かな都にあこがるゝやうな態度は、相互に慎まねばならぬ。

大東亞共榮圈は滿洲と支那が先づ中核をなしておることを忘れてはならぬ、現

に新設の大東亞省にも滿洲、支那、南方の三局に分かれてゐるではないか、吾等は理念は雄大であつても常に脚下を確かり踏しめて着實に前進せねばならぬ。いま一つは東亞の盟主として皇民の心構である、「八紘爲宇」の大理想と「萬邦をして各々その處を得せしむる」御聖訓とを奉體して皇道の大義に則り、正しきを守り慈親の念を以て臨まねばならぬ、「養正一徳」の具現である。嘗て白人のなせしが如き威壓や、搾取や、横暴や、欺瞞があつてはならぬ、東亞の諸民族が簞食壺漿、いづれも欣然として皇師を迎え、皇民を待ち、其徳澤に悦服するやうにしなければならぬ、民族の協和と、道義による共榮を圖らねばならぬ。

かくて大東亞共榮圏の建設は、着々と進捗して戦力は益々培養せられ、その未來は洋々として榮光に輝くことであらふ。

宰相東條大將は、機會ある毎に「戦勝完遂」のためにこの際、總てを之に集注し、結束し、指向し、歸納せねばならぬことを繰返し絶叫しておらるゝのは當然の要請である、

獨逸のゲッペルス宣傳相も次のやうに云ふておる、「今後この戦争は何年つゞくだらふといふ議論をするものがあるが、これほど馬鹿げたことはない、戦争をしてゐるものが、早く平和にしたいといふ氣持で戦ふのでは、却つてこの戦争は永くなる、平和のことなど考えずに一意専心、勝利獲得を目ざして戦ふとき、平和は案外早く來るものである」と。

勝てばよい、勝たなくてはならぬ。勝てば萬事は解決する、皇國興廢の大切な秋である、皇民は只々戦勝のため全力を盡くし、全部を捧ぐる事が刻下緊喫の急務である、雜念を交えてはならぬ、私心を挿んではならぬ、雜念や私心は鐵壁の陣營に弱點を形成する、弱點は即ち敵の乘する隙となる、一億一心、相提え相督してひたむきに戦勝完遂へ驀進するにある。

斷じて之を行へば鬼神も避くるのである。

この稿を終るとき、今日も亦た、北邊の警備に、南方の戡定に死生の間を往來するわが將兵を偲び、皇國を窺ふ敵機の襲來に耳目を傾注する哨戒の人々や、軍需や食糧の生産に夜を日に繼ぎて精勵する人々を憶オモヒひて、心から感謝の微衷を捧ぐ。

戰塵餘話 完

昭和十七年十一月二十五日印刷納本
昭和十七年十二月八日發行

定價 金壹圓六拾錢
發行部數 二、〇〇〇部

著者 石 黒 大 介

發行所 名古屋市中區松軒町一ノ一
清 正 堂 書 房

文協承認番號
ア240353號

版權
所有

印刷所 名古屋市中區西川端町二ノ二
清 野 印 刷 所

配給元 東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

尾張武揚社編
社長松井石根大將

尾張武揚人物語

B列6號 三三一頁
定價 二、一五

本書は専ら史實を基として尾張出身の各武人の傳記を掲げしものなるが尊皇の大義は皇國振武の第一義であるので勤皇事蹟の顯著なかがりこれを輯録せり故に本書郷土史蹟の研究家及各學校教師用として最も必要なるものなり。
目下大政翼賛會に於ては全國的に勤皇烈士護國先覺者顯彰運動中なり。

石黒軍醫中將著

戰塵餘話

B列6號 二五六頁
定價 一、五〇

大東亞戰の第一線の忠烈なる事蹟・銃後の涙ぐましき努力のユースを單に瞬間の感激に終らしむることなく此の中に教訓と手本と子弟訓育の資料を求めんがため輯録せし良書なり。

石黒大介著

天心洞雜記

B列6號 三三〇頁
定價 二、五〇

本書は處世訓、修養談、武道、遊戯、書畫、詩歌、茶道等多面的であつて且つ含蓄深く和、漢詩の逸事挿話、先哲の金言、名句の織込ました良書である

發行所

清正堂書房

名古屋市東區松軒町一ノ一
振替名古屋一五五八八番
電話 東京局 六九番
東京市牛込區若松町一〇八番
振替東京

關東地方三十八神社

戰勝祈願 神社參拜書集印帖

出口林次郎著 小形 八四頁 地圖入
定價 一、〇四

厚生省獎健會推薦

大東亞戰爭大詔渙發以來一週年を向へました、緒戰以來皇軍の赫々たる戰果は御稜威に依るは勿論神靈の加護による所大であります、この意味に於て體位向上と武運長久戰勝祈願を目的とした東京中心に三十八箇所神社巡拜を企圖し選定したのであります。

特賞 參拜祈願完了者には厚生省獎健會より證狀及戰勝祈願歩行賞(楯)を授與されます。

綠陰說法

出口林次郎著

本書を一讀すれば、自然に時局を認識し且つ修養と体力を養ふ爲に、一般の方は勿論男女學生間の必讀の書として推奨いたします。

目次 (重なる)

綠の麥島、初夏の香り
時代の風波、秋に想ふ
感 謝、初冬の光
十二月八日、海風よ吹け
水ぬるむ、八重の汐々
もゆる緑、雨七題
一粒の種、古い大地
故郷の味、強歩の朝

發行所

東京市牛込區若松町一〇八
名古屋市東區松軒町一ノ一

清正堂書房

振替東京 名古屋一五五八八番

A列6號 一〇八頁
定價 一、〇八

| | | | | | | | | |
|------------|---|------------------------------------|-------------------|-------------------|--|------------------|------------|-----------------------|
| 同編 | 同編 | 同編 | 同著 | 同編 | 同編 | 同編 | 同編 | 廣瀬俊幸編 |
| 寺まうてとハイキング | ポケット 東海地方特選 ハイキングコース 二〇〇コース 名古屋市内 | 東海地方 歩行路地圖 東部編 西部編 各編共 | 東海地方 釣暦 汐見表 | 名古屋近郊 釣場案内詳細地圖 | 南洋の印度洋詳細地圖 附 世界地圖 ハワイ、ビルマ、マレー詳細圖 | 名古屋市内 大名古屋市全圖 | 最新愛知縣詳細地圖 | 世界全圖 附 大東亞戰爭詳細圖 |
| B 3 | B 6 | 5 | A 6 | B 2 | B 1 | A 1 | B 2 | 大版 一〇八 五十錢 |
| 定價 一〇四〇 | 定價 〇八〇 | 定價 五〇 | 定價 〇三〇 | 定價 二〇四〇 | 定價 一〇八 | 定價 〇三五 | 定價 二〇四〇 | ボケット用定價 一〇四 二十錢 |

水野正次著

獨逸國防青年

B 列 6 號
定價 一圓五十錢
一圓一五

今次大戰に於けるドイツ軍の作戰、
ヒットラー戰、且つ國防青年の組織
と構成を記す

堀 文明著

日本の確信

A 6
171頁

(現代青年に與ふ)

現在稍々もすれば墮落に陥りつゝある
青年をして正しき團體の原理と勝
れたる民族の傳統の基礎に於て大東
亞戰の完遂に挺身せしめんとするも
のなり

定價 一、〇〇

東名古替
京市古名
市東古名
牛屋古名
込東古名
區松屋
若松
松軒
一町
一町
八〇番

清正堂書房



4
3

定價 ¥ 1.60